ガラス製のリンゲルびんを廃品利用した飲料用水差し

患者の飲料用水差し

看護用品の解説

ガラス製のリンゲルびんを使用した後，蓋の金具をはずし，ゴム栓はふたとして残して入院患者の飲料用水差しとして使用した。

看護用品にまつわるエピソード

水道水のカルキ臭さをとるために，前日の夕方に看護助手がビンに入れておき，翌日の日勤の看護婦が交換をした。患者の数のビンをワゴンに乗せてベッドサイドに届けた。

その後，専用のプラスティクの水差しに替わったが，蓋がコップになるので，口をつけたものを返しておくので不衛生になりやすく気をつけなければならなかった。時代が平成になった頃からベッドサイドに看護婦が飲料水を置かなくなった。県立中部病院にいた頃まではやっていたが，南部病院に移った 1990 年頃，置かれていないのに気づいて，看護婦になぜ置かないのかを聞いたら，水道水を飲む人はいなくなっていると言われた。今は，患者さん自身がペットボトルの水を準備しているが，500ml のボトルを持てない患者もいるし，また経済的な面でも患者さんには負担だと思う。

ガラス瓶は，飲料水入れ以外にも，手術室や病棟で使用する滅菌水や滅菌生食水入れにも使われた。その場合は，ビンに栓をしてその上をハトロン紙・ガーゼ・ハトロン紙と重ねて覆い，輪ゴムで留めた。（備瀬信子氏他，2003）

解説

ガラス製の点滴びんは形が安定しており丈夫であることから，輸液の容器がプラスティック製に替わるまで，病棟では飲料用水差しとしてだけでなく，うがい用イソジンガーグル液入れなどとしても使われていた。ビンに目盛りがついていたことから，飲水制限のある患者や，逆に飲水を控えがちな患者に対しては目盛りを目安に飲水量を伝えるのに使われ，重宝されていた。

ガラス製のボトルは重い上に割れる恐れがあることから，現在は，軽くて扱いが容易なプラスティックボトルに替わり，さらに内圧調整のための空気針が要らない袋状の輸液容器へと替わってきている。

患者が飲みたい時に飲めるよう枕元に常に飲料水を備えておくことは，自分で飲み物を準備できない患者にとっては，脱水を防ぐ上でも重要である。多くの病院では，食事時間にお茶が配られているが，行動制限のある患者の場合は水分摂取量が不足する傾向があることから，適切な水分摂取は看護者が観察し世話をすべき事柄のひとつだと言える。現在は，多種類の水やお茶が市販され個人の好みも多様化しており，入院患者自身がそれぞれに好みの飲料水を用意していることが多い。エピソードの中にあるように，患者の負担は大きくなっていると思われる。（嘉手苅英子，2004）